

氏 名	はっ とり み き 服 部 美 樹
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 333 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	“Aspects of the “Poor Man”: Handicapped Lovers in Hardy’s Novels (「貧しい男」の諸相：ハーディ小説の不利な恋人たち)

論文調査委員	(主 査) 助教授 佐々木 徹	教授 中村 絃 一	教授 若島 正
--------	--------------------	-----------	---------

論 文 内 容 の 要 旨

この研究は、「貧しい男」というモチーフをたどりながら、ハーディの小説を検証するものである。「貧しい男」とは、ハーディの未刊の処女作『貧しい男と淑女』と関係し、社会的に上位の女性に恋焦がれる下位の男性を意味する。ハーディの諸作品に頻出するこのモチーフは、彼の問題意識の表現装置として重要である。

これまで、『貧しい男と淑女』に関連付けて「貧しい」ヒーローを包括的に論じた批評は殆どなく、議論はヒロインに集中しがちであった。そこで本研究では、「貧しい男」のモチーフに注目し、これを使用する際のハーディの興味の在り処を考察する。そして「貧しい男」のモチーフが個々の作品を形作る原動力と大いに関係していること、またこのモチーフに着目することによって、一般には（特に女性描写における）矛盾に満ちているとされるような作品でも一貫した作品と読めることを示していく。

第1章では、『青い眼』が「貧しい男」とヒロインの関係を通して経験と支配という問題を考察していることを論じる。第2章は、『はるか群集を離れて』の「貧しい男」オウクが攻撃的ヒロインに対して和解という価値観を体現していることを示す。第3章では、『カスターブリッジの町長』のヒーローについて神経症的な不安という観点から一貫したキャラクターと見ることを提案する。第4章では、『森林地の人々』の「貧しい男」ジャイルズがパストラル的な価値観を問題視するための手段になっていることを主張する。第5章では『日蔭者ジュード』について詩的な読解を試み、「他者から見えないこと／見つかること」というテーマに関連付けてその「貧しい」ヒーローを論じる。

各章の議論が示すように、ハーディは「貧しい男」という装置を用いて、時には温和な、しかしたいていは挑戦的な考えを表現している。また初期作品では「貧しい男」と「淑女」の共感的な関係を支持することもあったが、後には批判的な態度へと変わり、アラベラというキャラクターを作るに至る。ハーディの価値観は特定しがたく、フェミニストとも女嫌いとも見られるが、少なくとも、「貧しい男」に対する興味を失わず「貧しい男」の献身について考え続けることが彼の諸作品を形作っていることは確かである。

第1章

本章では『青い眼』について論じる。この作品ではスティーブン・スミスが「貧しい男」のモチーフを示す。これが若きハーディの姿と重なるため、従来この作品は自伝的でむしろ未熟な作品であると見なされた。最近では特にフェミニズム批評が、型破りなヒロインを弁護した挑戦的な作品としてこの作品を再評価しているが、ヒロイン中心の議論ではこの作品が示す他の重要な問題が看過される。そこで本論では、まとまりがないと批判されることの多い『青い眼』が、実は田舎娘対都会の男という枠組みを繰り返し使うことで、支配や経験という問題への強い執着を一貫して示していることを論じる。

まず、スティーブンとエルフリードの関係に、ロンドンの紳士対田舎娘という型が見られる。エルフリードは、辺境の地に育った未経験な娘として、スティーブンはロンドンの経験ある技術者を装って登場するのである。しかしスティーブンの未熟さを見抜いたエルフリードは、支配的立場に立つ。このように二人の関係描写では、経験（未経験）と支配（服従）が

連動して描かれる。

支配・被支配の問題は、秘密というテーマとも連動している。スティーブンは出自の卑しさを隠すことでヒロイン一家と対等な関係を形成するが、秘密がばれてしまうと、出自の卑しさだけでなく、不正直であることから批判され不利な立場に陥る。こうして、エルフリードより上位に立とうとする彼の苦闘と挫折の連続が描かれる。

ヘンリー・ナイトが登場すると、再び田舎娘対都会の男という枠組みが生まれる。一見経験豊かなナイトに対してエルフリードは支配的立場をとることができないが、実際のナイトはエルフリード以上に恋愛経験がなく、仮に支配的な立場にあってもその支配は危ういものであることが示唆される。しかしナイトは優位性を保ちつづけ、エルフリードも徐々にナイトに服従するようになっていく。ここでも、支配・服従の関係を規定する要因としてハーディが問題視しているのは、正直さという規範である。正直さを重視するナイトは、過去を隠す不正直なエルフリードに対して道徳的優位性を保つのである。

興味深いのは、優位者の残酷さやそれに対する敵意をハーディが作品内で繰り返し示唆していることである。経験や支配という問題に強く執着した『青い眼』は、単に無垢なヒロインを弁護した作品というより、支配や力に対するハーディのこだわりをはっきりと示した作品と言える。

第2章

本章では『はるか群集を離れて』で「貧しい男」の役を果たすゲイブリエル・オウクがどのような価値観を体現しているのかについて、戦争のメタファーの分析を通して明らかにする。

従来この作品は、ヒロイン（バスシバ）の飼い馴らしの物語と読まれることが多く、飼い馴らしを肯定的に捉えるか否かによって、バスシバの成長物語と読まれたり破滅の物語と読まれたりした。本論ではこの飼い馴らしというテーマ（バスシバの経験を逸脱から順応への移行と見なすこと）を相対化し、作品の喜劇的な面を読み取るとともに、オウクが果たす役割やオウクとバスシバが形成する関係の意味を論じる。

具体的には、レイコフ等認知言語学のメタファー論（メタファーとは、ある概念体系を別の概念体系に写しかえて理解すること）を踏まえて作品に頻出する戦争のメタファーに注目し、そのメタファーが準拠している価値観や世界観に配慮しながら作品を分析する。この過程で、飼い馴らしというテーマは相対化される。というのは、ハーディはバスシバの経験を描写する際に戦争のメタファーを頻繁に用いているが、これはバスシバの逸脱性よりもむしろ闘争性を強調し、さらに、バスシバの経験を逸脱から順応への移行としてではなく、勝利を求める一連の闘争として意味づけているからである。この枠内で読むと、バスシバとの闘争を回避しているオウクの役割、またオウクとバスシバの結婚を「友愛」と評価する語りもこれまでとは異なる意味を帯びてくる。従来の批評は「友愛」を情熱の不在と関連づけ、ここにヒロインの順応を読み取る傾向にあった。しかし戦争という概念体系の中では、それは味方の発見という肯定的な意味を持ちうる。するとこの作品は、勝ち負けにこだわるバスシバの二者択一的な闘争性に対して休戦・協調という第三の選択肢（オウクが体現する）を提案し、それがついに受け入れられるまでを描いた作品と読める。本作は、「貧しい男」が「淑女」に対して抱く熱意を、珍しく喜劇的な雰囲気の中で扱った作品である。

第3章

本章では、『カスターブリッジの町長』で「貧しい男」の役割を果たすヘンチャードについて、フェミニズム批評が提案した「女性化」という解釈を検討し、心理学的アプローチの方がより適切な解釈を示しうることを論じる。

まず、Elaine Showalterの論文“The Unmanning of the Mayor of Casterbridge”(1979)以降定着した「女性化」という解釈について、その内容を確認する。この解釈では、一般に女性的と見なされる価値観や態度をヘンチャードが発見して受け入れるという変化に注目する。そしてこの「女性化」を自己発見や成長と関連付ける。しかしヘンチャードの変化を肯定的に捉えるこの解釈は、作品の描写と矛盾し、楽観的すぎる。またヘンチャードの変化に焦点を絞っているため、ヘンチャードの一貫性を十分説明していない。

そこで、これとは別の心理学的視点からもヘンチャードの変化が説明できることを示す。カレン・ホーナイの考え方を踏まえた場合、ヘンチャードの態度や価値観の変化は防衛戦略の変更と説明でき、人間的な成長とは無関係である。このように心理学的には、ヘンチャードは解決できない不安を抱えて防衛戦略をとり続ける人物として一貫性を持つことになる。

次にヘンチャードの描写がいかに関心する読み方を促すかということを論じる。ヘンチャードは一貫して拒絶という文

脈とともに描写されるが、これはホーナイの言う「基本的不安」が形成される状況に酷似している。また何人かの批評家はヘンチャードの性格を説明するために彼の内面の虚無感に着目しているが、これも「基本的不安」の概念を想起させるものである。このように、ハーディがヘンチャードによって表現しようとしたものはホーナイの学説によって明快に説明できるのである。

この作品は「貧しい男」の恋愛関係を取り上げない点で他の作品とは異質であるが、ヒーローが、下位の立場を暗示するような不安を強烈に表現している点で、『貧しい男と淑女』のテーマを独自に探求した作品と読める。

第4章

本章では、『森林地の人々』で「貧しい男」のモチーフとして機能するジャイルズについて考察する。

従来の批評は、ジャイルズについて、ハーディのパストラル的価値観を体現する人物として想定されているにもかかわらず、実際にはその誠実さや献身が無意味なものに見えてしまう結果になっている、と考えてきた。だが、ジャイルズが規範的人物として想定されている、という思い込みはそもそも妥当なのだろうか。もしそうなら、『森林地の人々』は作者の意図とは矛盾する効果を生じる、失敗を含んだ欠陥品となってしまうが、果たしてこれは正当な評価だろうか。本論では、このような問題意識から、ジャイルズに関する思い込みを捨てて作品を読むことを提案する。

まず、ジャイルズを立派な英雄として賞賛する態度について、その根拠を検証する。一般にジャイルズは、自然あるいは騎士道精神を体現する人物として理解されている。彼が規範的人物として想定されているという思い込みは、実はこのようなジャイルズ像を根拠にしている。しかし、これらはグレースが構築する理想化されたジャイルズ像である。グレースは、パストラル嗜好を持ち、騎士道精神を重んじてジャイルズを賞賛するが、いずれも不実なフィッツピアーズを批判するためのレトリックとして機能している。このようにジャイルズの理想化はあくまでグレースの視点で行なわれており、必ずしも作品自体の価値観を体現するものではないことを確認する。

次に、ジャイルズを理想化し賞賛しようとする態度に対してハーディが作品中で表明している異議について例証する。まずハーディは、グレースのような物の見方では「具体的な人間性から切り離すことのできないあらゆる汚点や欠陥」が見落とされるという認識を作品内で示している。また「騎士道的な」ジャイルズから距離を保ち、騎士道に伴う搾取的な構造を描写している。さらにジャイルズ描写では、彼のやり損ねたことを列挙している。以上から、ジャイルズの献身が無意味に見えるのは、ハーディの想定外の効果ではなく、むしろハーディが想定した通りなのではないか、と推察する。

最後に、ヒロイン描写がジャイルズの自己犠牲の不合理さを裏付けていることを論じる。一般に、ヒロインはヒーローの献身に値し誰がヒロインを勝ち取るかということが作品の要である、と考えがちであるが、ハーディの描写はそのような思い込みを打破している。グレースは独立した強いヒロインで、搾取的でさえある。そのグレースを守るために犠牲となるジャイルズが不合理に見えるのは、当然のことであり、まさにハーディの想定通りなのではないかと推論する。

以上から、ジャイルズの犠牲を美化せずあくまで不合理なものと描いているこの作品は、当時のパストラル嗜好や騎士道精神賞賛に対する異議を表明した作品ではないかと結論する。

第5章

本章では「貧しい男」というモチーフに対するハーディのこだわりを強く示した後期小説『日陰者ジュード』を論じる。この作品では、貧しい男が学問を受けることの困難さと、恋人が結局は恋敵と結婚してしまうという不利な恋が扱われている。そして作品全体を通してハーディは、様々な意味で他者の目にとまらないジュードの姿に強い関心を示している。そこで本論では、この「他者から見えない」という状況に対するハーディの関心を描いた詩的な小説として『日陰者ジュード』を論じる。その際、「見えないジュード」というモチーフが「貧しい男」ジュードの多様な状況を包括しうる重要なモチーフとなっていることに注目し、そのモチーフが表わす「他者から見えない」という状態がどのような事柄と連動し、どのような意味を帯びているのかを考察した。

「見えない」という状況は、まず、社会的な向上心と関連づけて示される。ジュードは大学進学を目指す、単なる労働者に過ぎない彼の存在や向上心は大学関係者からは認知されない。「見えないジュード」は社会的身分故に向上心を抑圧されるジュードの苦悩を効果的に暗示するモチーフとなる。

スーが登場すると、「見えない」という状況はスーに対する欲望と連動して示される。例えば、欲望を育む白昼夢や欲望

に対する羞恥心とともに示されるのである。このようにスーとの関係における「見えないジュード」は、欲望を隠しているジュードの葛藤を暗示するモチーフとなる。

このようにハーディは「他者から見えない」という性質を中心にジュードを描いているが、「他者から見えない」ジュードの苦悩に共感しているわけではない。「他者から見えない」状況が肯定的な意味を帯びそうになると、必ずそれを「見つけて」破壊する人物（主にアラベラ）を登場させているのである。ハーディは、「他者から見えない」という状況に強い関心を示してはいるものの、「他者から見えない」ジュードを美化することは決してないのである。

論文審査の結果の要旨

トマス・ハーディ（1840-1928）は小説家としても詩人としても高い評価を受けている稀有な文人である。小説家が手遊びに詩を書くとか、詩人が何冊か小説を書いたという例は少なくはないが、両方のジャンルにおいて質量ともに英文学史に残る作品を残したのはハーディだけである。その事実から当然予測されるように、彼の小説言語は詩的な密度の濃さを持っており、テキストの一字一句は慎重な吟味に値する。服部美樹氏提出の本論文は、何よりも、そのような精読において豊かな成果を挙げた研究として高く評価されるべきものである。

「貧しい男と淑女」——これはハーディの処女作で、未発表に終わったまま消失した小説の題名であり、以後の彼の小説において頻繁にプロットの主軸を成す人物関係でもある。その点は夙に指摘されてきたのだが、論者は近年の研究者がとかく「淑女」すなわちヒロインに関心を寄せているのに対して、「貧しい男」の方に焦点を合わせることで新味を見せ、『青い眼』（1873）『はるか群集を離れて』（1874）『カスターブリッジの町長』（1886）『森林地の人々』（1887）『日陰者ジュード』（1895）の5つの長編小説において、そのモチーフがどのように機能しているかを丁寧に考察している。

ハーディの言語表現に対する論者の俊敏な反応は、例えば、『ジュード』において主人公が他者の眼に写らない「透明性」の比喩を用いて描かれていることを明らかにする手際のよさや、『はるか群集を離れて』において人生を「戦い」と見る比喩に着目し、この小説を従来言われてきた「荒々しい」バスシバが「飼い馴らされる」という物語ではなく、闘争的な彼女がオウクという戦友を得る物語と読み替える試みに現れている。『青い眼』についての考察には論者の非凡な感性がより明確に示される。ここでは男女の恋愛における力関係を、「経験」（experience）および「上位」（ascendancy）というモチーフを使って描き出すハーディの技法が精査されている。論者の指摘する通り、ヒロインのエルフリードが「経験」豊かに見える都会人ナイトの目の前で欄干の上を歩く場面や、彼女が徒歩のステイーヴンに対して馬上の人となる構図には明らかに「上位」のモチーフが窺える。殊に興味深いのはナイトが崖淵にぶらさがる場面の分析である。地質学の心得のある彼が三葉虫の化石と面と向かい、悠久の時の流れに思いを馳せることから、この箇所は専らダーウィンの進化論と関連してこれまで論じられてきた。ところが、論者は崖の上にいるエルフリードがナイトを救出する位置関係に着目し、ここにも「上位」のモチーフが観察できると言う。そして、助けられたナイトが直ちに「支配的な力を示す位置を取り戻す」と記述されていることに触れつつ、この大きな山場を契機にして、エルフリードは以後隷属的な立場に甘んじると鋭く指摘している。

しかしながら、本論で最も優れた部分は『カスターブリッジの町長』についての論考であろう。この小説は、仕事を求めて放浪していた貧しい主人公マイケル・ヘンチャードが妻を売り飛ばすという衝撃的な場面から始まり、発作的な行動を悔い改め、苦勞して町長にまでなった彼が自己破滅的な性格ゆえにそこから転落していく運命をたどったものである。この人物の解釈について、1979年に高名なフェミニスト批評家エレイン・ショーウォルターが発表した論文は大きな影響力を持ってきた。感情が極端に揺れ動くヘンチャードは、弟のように可愛がっていたファーフレイに裏切られたと感じると彼を殺そうとするのだが、土壇場で踏みとどまる——その場面においてヘンチャードは「男らしさを失った」（unmanned）という語が用いられている点をショーウォルターは重視して、主人公の心理はここで大きな転回点を迎え、以後彼は道徳的な発展を遂げるとし、その成長を彼の「女性化」と結びつけた。つまり、ヘンチャードは一般に女性的と考えられている価値観（愛情深さ、従順さ、等々）を受け入れることによって人間として一皮剥けたとするのである。論者はこれに異を唱え、問題の場面で鍵となるのは最後にファーフレイがヘンチャードを無視して去って行くという点であり、くず折れたヘンチャードの姿は「女性的な」屈従を示すのではなく、愛情の対象を失った彼の内的崩壊を表すのだと述べる。そして、反論を補強するためにカレン・ホーナイの心理学を援用する。ホーナイの言う「基本的不安」、すなわち自分は世の中から拒否された

存在だという不安感は、確かに作品冒頭のヘンチャードに見られるし、彼の行動はホーナイ理論にある「防衛戦略」の概念によって説明がつく。要するに、彼の人間性が変わるのではなく、彼が取る「防衛戦略」が攻撃的なものから妥協的なものに変化しているだけだ、と論者は述べる。実際、ファーフレーを殺し損ねた後でも、ヘンチャードは義理の娘にあたるエリザベス・ジェインを失うのを恐れるあまり、嘘をついて彼女を手元に置いておこうとする。ショーウォルターのヘンチャード成長説をとればこの行動は説明しにくいのだが、論者の言うように、彼は依然として同じ不安を覚え、新たな防衛戦略に訴えつつ自分の愛情の対象を確保しようとしていると考えれば筋が通る。

もっとも、本論にも問題がないわけではない。『森林地の人々』においてハーディは主人公のジャイルズを通してパストラルや英雄崇拜という概念を批判していると述べられているが、論拠は脆弱であり、説得力を欠く。また、「貧しい男」のモチーフを探るとは言うものの、『はるか群集を離れて』と『青い眼』を論じた章では、その探究が論の中心を形成しているとは言えず、構成の弱さが目につく。しかし、『カスターブリッジの町長』と『青い眼』を論じた章はそれらの短所を補って余りある。これらの優秀性は、前者が日本英文学会の機関誌に、後者が国際ハーディ協会の機関誌に掲載されていることから、客観的に明らかであろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年9月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。